

「思考と行動における言語」
6 - 9章

松本崇
大槻千草

「この本は、これらの伝統的な目標に、現代の意味論の方法をもって迫ろうとしたものである。一意論的方法をもってとは、人間生活における言語の役割を生物学的に機能的に理解し、また言語の種々の用途を理解するということである。・・・」(p.IV)

「すなわち、説得し行動を制御する言語の働き、情報を伝達する言語の働き、社会の結びつきを作りそれを表現する言語の働き、そして詩と想像の言語の働きなどである。」

I . 言語の機能

1. 言語と生存
2. 記号
3. 報告、推論、断定
4. 文脈
5. 言語の二重の仕事

→ 言語の性質

I. 言語の機能

6. 社会的結びつきの言語
7. 社会的制御の言語
8. 感化的コミュニケーションの言語
9. 芸術と緊張

→ ‘社会と文化’ を形成する側面を持つ言語

登場する用法

6. → 言語の前期号的用法

7. → 言語の指令的用法

8.9. → 言語の感化的用法

「すなわち、説得し行動を制御する言語の働き(7)、情報を伝達する言語の働き、社会の結びつきを作りそれを表現する言語の働き(6)、そして詩と想像の言語の働き(8,9)などである。」

※()内は章の番号

6. 言語の前記号的用法

前記号的用法：

表出的身振りの音声による等価物として使われるコトバの用法のひとつ

共存↕混合 (p.88)

記号的用法：

あるコトバがある物を、代表して表す(ただしコトバ≠物)という用法

6章小見出し

- 1) 表出としての音声
- 2) 音声のための音声
- 3) 平凡なコトバの役割
- 4) 話をつなぐこと
- 5) 儀式
- 6) 文字通りに意味をとる人

共通した特徴

- ・「使われているコトバの意味はほとんど無視されている」
(p.90)
- ・「話しの目的は、(略)情報を伝達することではなく、親交の
確立にある」(p.90)
- ・「知り合い同士は特別に話し合うことがなくとも、話し合うこ
とを好む」(p.94)
- ・「儀式的発言で‘ためになった’のは何であろうか？それは
社会的結びつきの再確認である。(略)社会は一連の言
語的シゲキに対する共通の反応の、このようなキズナで
結びつけられている」(p.96)

→ ‘音’ がつなぐ人間関係

前記号的用法が意味すること

「それ(コミュニケーション)は、コトバを使用しないでも有効でありうるということである」

「けれど言語的使用の方が人間の間では習慣的になっているので、われわれの感情を表すのに、人を撲り倒すかわりに、言語でかれを批難することが多い」(p.97)

前記号的用法から導ける ‘会話’のコツ

- 話しをいっしょにするということが社交的会話の重点
- 一致が直ちに得られる話題を選ぶ
- 平凡なきまりきった(耳慣れた的を得ている)話題を選ぶ

→同意中心の会話

- (文字通り)コトバのキャッチボール

7. 言語の指令的用法

指令的用法:

人類の未来の活動を制御し、指導し、影響を与えるためのコトバの用法のひとつ。

しばしば感化的用法(及び非言語的感化的訴求)と組み合わせて用いられる

感化的用法:

情緒的反応を主として起こさせるような言語の使い方。‘反応’には、ただ強い感情を引き起こさせるだけでなく、微妙な、無意識の反応も含む。

7章小見出し

- 1) 事を起こさせる
- 2) 指令的言語の約束
- 3) 社会の土台
- 4) 集团的承認をともなう指令
- 5) 「権利」とは何ぞや？
- 6) 指令と幻滅

指令的用法による‘社会’形成の論理

「コトバにより人は未来の出来事に影響を与え、またそれを広範囲にわたって制御することができる」(p.103)

= 指令的用法



ただし、前提として

①「それ故、指令的言語を発言する人は誰も、それとはっきり言うにせよ言わないにせよ約束を付属させているのだから、(略)できるだけ確実な発言をし決して偽りの期待を持たせることのないようにすることが道徳的な義務である」(p.107)

・・・誠実さ、相互信頼の存在

指令的用法による‘社会’形成の論理

②「(社会という網の目は)本質的に、我々が努力して実現するとされている未来の出来事についての叙述から形成されている。こうした同意がなければ社会などというものは存在しない。(p.107)

…**集团的承認(同意)の存在**

cf.集团的承認についての筆者のコメント

「集团的承認をともなった指令的発言、すなわち、集団の利益のために、個人に、ある行動の型を守らせようとすることは、言語的事象の中で最も興味ある事である。」(p.108)

指令的用法による‘社会’形成の論理 【まとめ】

ある集団において、

- ①誠実さ、相互信頼が存在
- ②集団的承認(同意)が存在



言語の指令的用法が機能し、社会が形成される

6,7章のまとめ

前記号的用法☞ 個人間でのコミュニケーション

指令的用法☞ 人間社会存続の基盤

共通キーワード: 同意

8,9. 言語の感化的用法

感化的用法:

情緒的反応を主として起こさせるような言語の使い方。‘反応’には、ただ強い感情を引き起こさせるだけでなく、微妙な、無意識の反応も含む。

- I . 隠喩、直喩、引喩、皮肉・哀感・ユウモア
- II . 事実と書き方
- III . 文学と芸術のはたらき

I . 隱喩、直喩、比喩
皮肉・哀感・ユウモア

隠喩

たとえを引いて説明するのに、表現上では「の如し」とか「ようだ」のようなたとえの形式になっていないもの。

→翻訳の話題へ

直喩

「たとえば」「ような」などの語を使ってたとえる仕方。

→俗語の話題へ

引喩

ことわざ・故事や有名な詩歌・文章などを引いて、自分の言いたいことを表現すること。

出典：岩波国語辞典第四版

①【隠喩】から生じる翻訳の問題

「原文の情報的内包に従った翻訳が、感化的内包を誤って伝えてしまったり」(またはその逆)

「ある文化圏においてはよく理解されるような隠喩が、他の文化圏ではまったく異なった意味になることがある。」(p.122)

川端康成とサイデンステッカー

- 谷崎、三島、川端などの作品の英訳
- 『雪国』の英訳では、川端康成のノーベル文学賞受賞に大いに貢献した。実際、川端康成自身、「ノーベル賞の半分は、サイデンステッカー教授のものだ」と言い、賞金も半分渡している。
(Wikipedia より)

翻訳とは何か

「訳者は自分の文化的背景と自分の言語能力を総動員して異文化のテキストを迎え撃ち、原著者固有の領域でもなければ、訳者固有の領域でもない第三の領域を、翻訳という不可能な作業によって創出しようとするのである。」

「W文学の世紀へ一境界を越える日本語文学」(沼野充義) より引用

翻訳のジレンマと愉しみ

「翻訳は必要悪である。少なくとも文学作品に関しては、原文が自由に読めるのであれば原文で味わうべきであって、誰も翻訳など必要としないだろう。しかし、(略)誰もが原文で読めるわけではないからこそ、翻訳というものが必要になってくる。(略)しかし、悪には悪の楽しみというものがある。時には善以上に。」

同出典

②俗語 (slang)

「俗語は常に隠喩と直喩とを使う」(p.124)

例1: 直喩

as phony as a three-dollar bill

例2: 隠喩

keep your shirt on

俗語の例

- 日本語: オシャンティー、外こもり...
- 英語: shorty, boo ...

→ 日本語は一過的な流行語(単語)としての性質が強い

一方、英語(米)ではある程度持続的で、rapなど歌で用いられるなど共有されている

③【引喩】の効果と前提

「従って、引喩は自分の感じを表現し、聞き手にもその感じを呼び起こす手っ取り早い方法」

「けれど引喩は聞き手が言及されている歴史や文学、国民、出来事を十分に知っている場合にだけ感化的に有効である。」

cf.p.90

皮肉、哀感、ユウモア

- ・「(皮肉、ユウモアは)不調和な比較の結果、矛盾が感じられるが、その矛盾はわれわれが話しているものに対する当然の感じと、表現によって起こされる感じとの間の矛盾である。この二つの矛盾する感じは融け合って、第三の新しい感じを生み出す。」
- ・隠喩、直喩、引喩の応用編
- ・翻訳でも、隠喩同様に苦勞を伴う箇所

引喩を使ったユウモア

【クイズ】

以下の本のタイトルはある文学作品の題名に基づいています。その作品名は？

- ・「学歴の耐えられない軽さ」(海老原 嗣生)
- ・「百年の誤読」(岡野 宏文, 豊崎 由美)

→「存在の耐えられない軽さ」(M.クンデラ)

→「百年の孤独」(G.マルケス)

I . まとめ

- 人と人との一脈の共感は感化的用法により得られる。
- 感化的用法はある程度恣意的な、修辭的なものであり、具体的な方法として隱喩、直喩、引喩などがある。

▪

Ⅱ．事実と書き方

①感化的内包が起こる2つの場合

・事実そのものが感化的である場合

「特別に文学的くふうを用いなくとも、事実自体が感化的であり得る」場合、「書き手・話し手は『自分の感情を抑えている』」 eg. 島根女子大生殺人事件



・表現の仕方によって感化的である場合

「言語の感化的要素は書き手か話し手が自身の感じを表出している」 eg. 「椿姫」(デュマ・フィス)

日経新聞と週刊ポスト

- 「大衆的な雑誌では、書き手は読み手が自分で結論に達する可能性に頼っていない。読み手の知力に労をかけることを避けて、書き手は読み手のために断定を下してくれる。」
- 「高級誌はかなり読み手に任せるという傾向をとる。事実が『自ら語っている』場合には全く断定を下さないか、またはあらゆる断定には事実を十分に付記し、読み手が望むならほかの断定も下せるようにしてある。」

Ⅲ. 文学と芸術のはたらき

ここでなぜ「文学」「芸術」が登場するのか

「文学では個人の感じの表現が中心的なものであるから、感化的要素こそあらゆる文学作品において最も重要なものである。」

文学の効能（作り手）

「これらの研究結果は、言語を発する者の立ち場から見た、発言ということのもっとも重要な機能の一つは緊張の緩和にあることを示している。
(略)小説・戯曲・詩は、(略)生体が強い緊張を経験する時の内的必要から出る、その緊張が喜びの結果であろうと、嘆き・不安・挫折からであろうと。」

文学の効能（読み手）

- ・「われわれが物語の中の人物と自分を同一視する時、劇作家や小説家はわれわれに整然とした一連の記号的経験を味わわせているのである。」
- ・「ある発言が話し手の緊張を緩和するものとするれば、聞き手にも同様の緊張があればそれも緩和することができる。」(p.145)

文学[芸術]とは何か

①精神の健康を保つための道具

「記号を用いる人類にとって必要な生物学的機能、すなわち、人々に心理的健康と平衡を保たせる機能を果たすものとして存在する。」(p.150)

②秩序をつくる方法

「宗教・哲学・科学・芸術はいずれも、方法こそ違え、経験の細目の矛盾によって起こされた緊張を、…やがてその細目の間に何らかの秩序を打ち樹てることにより解消する方法なのである。」(p.155)

作家のことば

「音楽にしても文学にしても、(略)芸術をつくるということはどういうことか？最初に混沌というか、混乱したナマのものがあります。私たちの人生、現実の世界はまず混沌としている。それに秩序をあたえる、かたちをあたえることが、芸術をつくるということだと私は考えるのです。」

「あいまいな日本の私」(大江健三郎)

文学の形式

「けれどもより重要なものは作品の素材—すなわち作者がまとめようとする経験そのもの—の方から要求されるまとめかたである。材料が小説の伝統的な型に合わない時には、作家は従来の型よりも自分の表現に適した、まったく新しいまとめ方を創造することもある。」(p.156)

そのまとめ方を研究するのが文学批評家の仕事。

「(略)、その他、専門的な文学批評で取り扱うことのすべてのことは、記号的経験の全複合体が(すなわち出来上がった物語または劇が)作者の意図した影響を読者に及ぼすようにこの記号的体験を組み立てる技術に関するものである。」

○○語と○○人と○○文学

例

日本語と日本文学、仏語と仏文学

英語と英米文学、ロシア語とロシア文学...

→言語の数だけ‘文学’がある

→分かちがたく結びついている作品(その言語的表現技巧によるところが大きい)作品ほど、翻訳不可能性が高まる

言語と思考と文学の結びつき

「おそらく他の文化圏の人々は、世界を異なった様式で見ているのではないだろうか。とりわけ、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ラテン語などとは構造がとても異なる言語を話す人々は。」

「言語学と小説」 Roger Fowler (訳: 豊田昌倫)

→ 言語がその文学(国文学)が扱う題材や、形式をある程度規定している可能性

Nationality, Ethnicity と Language

【外国語⇔日本語】

- ・日本語で書く外国人

例：楊逸、リービ秀雄

- ・外国語で書く日本人

例：水村美苗、多和田葉子

【海外作家】

- ・ Ethnicity と Language のズレ

例：カズオ・イシグロ、ジュンパ・ラヒリ

- ・ 複数言語で書く作家

例：ミラン・クンデラ

母語からの脱出

「私は、通じすぎて衰微しかけた言語に、意味伝達の緊張感を与えて活性化する方法として、系統の異なる言語の二重使用が有効に働くのではないかと思うことがある。(略)英語やフランス語など、旧植民地宗主国の言語であえて作品を書いているアフリカ人作家の表現力に、独特の面白みと未来への活力を感じる人が多いからだ。」

「自分が幼児から馴れ親しんでいると思っている言語を、それ以外の言語をおぼえ、使うことによって異化し、ことばによる自己表現にダイナミックな創造力を、ひとりひとりが、たとえ作家でなくとも、日常の言語行為に吹き込む一情報化、地球化状況を活用した、現代以後の人類の言語のあり方として、私はそんなことを夢想する。」

「コトバ・言葉・ことば」川田順造

翻訳体で書いた井伏鱒二

「井伏鱒二は新しい文章をつくろうとした文章家だった。明治以来、森鷗外もそうですし、漱石もそう、大岡昇平、安部公房もそうですけれども、新しい文章をつくるということで外国語の文脈、外国語の文体をあわせ考えた。それが日本人の新しい文章の作り方です。近代以後は。この百二十五年、そのような意味で、日本の新しい文体家たちは、ヨーロッパの新しい文学をまなぶ者たちだったのです。」

「あいまいな日本の私」より

【文学】とは：まとめ

文学とは、読み手・書き手両者に、経験上生じた矛盾の間に何らかの秩序をうちたてるという方法によって、緊張の緩和すなわち精神の健康をもたらすものである。

文学作品は、用いる言語、小説や詩歌といった構成、筆者独自の文体といった要素が複雑に絡んで形成される。

おまけ：示唆的なメッセージ

「〈J文学〉などと言って、相変わらず井戸の中の蛙のように自己満足している場合ではないのだ。」

「W文学の世紀へー境界を越える日本語文学ー」
(沼野充義)